

いちのせきから ストップ温暖化

eco
第28号

発行

一関地球温暖化対策地域協議会(IEL)

令和2年3月15日

差し迫る“気候危機” 「科学」の要請に基づく行動強化を!!

昨年10月12日は台風19号の接近に伴い、明るいうちから一関地域や千厩地域の中心部に避難勧告が発令、さらに深夜になって千厩川では氾濫の危険性が高まったため避難指示(緊急)が発令されました。この時、一関市に対しても最高の警戒レベル5となる大雨特別警報が初めて発表され、この台風による特別警報が13都県に広がりました。また、この前後には台風15号による暴風被害、21号と低気圧による浸水被害があり、広域化・激甚化する気象災害が日常化しています。

世界でも熱波や大雨、山火事と海面上昇などの甚大な気象災害が頻度を高めて発生しており、私たちが気候変動と呼んできた事象が“気候危機”へと転換したのではないかと考えられています。



阿武隈川・新川・内川合流点、丸森町中心部(2019年10月13日 国土地理院撮影)

“気候危機” 科学者の予測を超えるスピード

南極では今、温くなった海水が陸から海に張り出した氷を融かし、氷の消失量が年々増えています。海に突き出た氷がなくなると陸地の氷が滑り落ち、海水面の上昇が急激に進む恐れがあります。

オーストラリアの南東部では乾燥と高温のために山火事が拡大し、焼失面積は日本列島の半分になりました。シドニーなどの都市部でも煙による健康被害が懸念され、動物類の焼死も10億匹と推定されています。

世界の科学者たちは、地球温暖化の観測結果からその将来を予測し警鐘を鳴らし続けてきました。しかし、温室効果ガスの排出削減が進まないまま時間が過ぎ、現実には予測以上の速さで進行しつつあります。

人類共通の利益とは何か

昨年12月、スペインのマドリッドで開催されたCOP25では、各国の温室効果ガス排出削減目標の熱意ある引き上げが合意されませんでした。

現在、提出されている各国の排出目標を加算すると気温上昇は3℃となる予想ですが、1℃を超えた今ですら一線を越えた気象災害に直面しています。2℃を超えると様々な現象が重なり合い、取り返しのつかない事態が予想されています。このまま進むと1.5℃に達するのはここ10年ほどとの予測もあり、“気候危機”の緩和のためには2020年代が正念場となっています。各国政府の思惑を超えた人類共通の利益を考えなければなりません。

未来のために実効ある行動を

COP25に参加したスウェーデンの環境活動家グレート・トゥーンベリさん(17歳)は、「私たちは行動を求めている。本当の行動はまだ始まっていない。」と訴えました。

G7の中で日本だけが石炭火力発電所の新設にこだわっていますが、現下の“気候危機”に意を介さない見識の低い政策と言わざるを得ません。どんなに省エネや再エネの拡大に努めても、石炭火力を使い続ける限り温暖化対策に背を向けていることになります。脱石炭(脱原発も無論)は最初の一步、その上で低コスト化が急激に進んでいる再エネによる電力供給を一層推進し、可能な限り車や給湯器などの電動化を進めることも大きな一歩です。

今、私たちの身の回りでもCO₂の排出大幅削減の選択肢は豊富です。家庭用太陽光発電、太陽熱温水器、薪ストーブ、薪ボイラー、ペレットストーブ、PHV、電気自動車など、そしてゼロエネルギー住宅です。“気候危機”に対し、大きな声を上げ始めている若者たちに大人が応える番です。



COP25で訴えるグレート・トゥーンベリさん(高橋郷さん提供)



デモ行進の出発前、プラカードを掲げて“気候危機”を訴える参加者たち(2019年9月20日 東京都渋谷区)

脱炭素コンテスト in いちのせき

発表会

気候変動の影響による災害が世界中で起き、一関でも初めて大雨特別警報が出るなど、今や脱炭素な暮らしに転換しなければならないとの思いから、2月2日に当協議会主催、岩手県地球温暖化防止活動推進センター共催で、第1回脱炭素コンテストを開催しました。

コンテストには11名の応募があり、それぞれの家庭の取組について発表が行われました。58名が聴講しました。



グランプリを受賞した佐々木幸さん(右)の発表

取組内容としては、太陽光発電8世帯・薪ストーブ7世帯・太陽熱温水器2世帯のほか、自家用車に関してはHV車・PHV車・EV車の導入が目立ちました。

また、CO₂の排出量が正味マイナスとなった家庭が2世帯ありました。

全体では薪ストーブの利用者が多く、薪の調達も近所から貰ったり、中山間地利用対策で貰う、自分の山の手入れをしながら倒木や間伐材を薪として利用し、森林の保全とCO₂吸収の促進を暖房に利用するといった、一関ならではの「脱炭素」な暮らしが目を見せました。

発表者からは

- ・1つのことに取り組んでみると、いろいろと環境につ

いて見えるようになった。

- ・生まれた時から当たり前に木と共にある暮らしが続いている。
- ・ソーラーパネルは100%リサイクルできるから安心して導入した。

と、体験ならではの声を聞くことができました。

グランプリには、ZEH住宅に太陽光発電を設備し、ゼロエミッション自動車のリースに乗り、設備投資をしても元が取れると発表した佐々木幸さん(厳美)が受賞。

選考委員特別賞には、太陽光発電は電気の「見える化」でいろいろなことに気づくようになって省エネが進み、薪ストーブは近所から木を貰い、薪作りは手間がかかるけれどもそれ以上に楽しいと発表した村岡諭さん(花泉)が受賞。

選考委員会の講評では、「脱炭素」に取り組んでいる発表者が、何より楽しみながら暮らしていることが伝わってきて良かったというものでした。



選考委員特別賞の村岡諭さんの発表

この発表会を聴講した方の感想では、

- ・発表時間が短くて気の毒な印象、発表者を5人くらいに絞ってゆっくり聞きたかった。
 - ・私は子孫への贈り物として少しでも脱炭素に貢献できたらと思っていましたが、どうして、どうして経済効果も十分だと思いました。
 - ・脱炭素に結びつく素晴らしいコンテストだったと思います。毎年実施して欲しい。
- など、多くの声が寄せられました。

次回の「脱炭素コンテスト」には、是非あなたの取組を聞かせてください。

セミナー

「今、なぜ脱炭素なのか」 加藤三郎氏 講演

発表会に引き続き、半世紀にわたり日本の環境政策を体現し続けた「NPO法人環境文明21」顧問の加藤三郎氏にご講演をいただきました。

IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の1.5℃特別レポートと気候変動と土地レポート、世界気象機関や国連環境計画の最新のレポートを紹介し、大気中のCO₂濃度が2015年に400ppmの大台を超え、産業革命以前の約1.5倍に達し、一年当たり2.3ppmの割合で増加し続けている。1.5℃以内の目標達成には温室効果ガスの急激な削減が必要だ。世界経済フォーラム(ダボス会議)でのスウェーデンの女子高生グレタ・トゥーンベリさんの要求、「世界は火事場になっているので2030年、いや2021年

までだって待ってられない」、「大人が行動しないことは時事刻々と火に油を注いでいることになる」などに応えるべきだ。こともあろうに、米国防務長官は彼女に対し「経済学を学んで来い」と言うが、その経済学こそが問題だ。社会のシステムを変えないかぎり、阿鼻叫喚の世界に追い込まれると結びました。



脱炭素化について話す加藤三郎氏

IEL主催 自然エネルギー等見学会報告

当協議会の恒例行事となった自然エネルギー等見学会を、昨年11月19日に開催し、冬の訪れを感じる寒い中にもかかわらず30名の参加をいただき、市内及び奥州市の4施設の見学をしてきました。



花泉図書館前にての参加者記念撮影

①八幡沢発電所：小水力発電施設（一関市巖美町）

平成28年に世界かんがい施設遺産に登録された歴史ある照井堰用水は、古くから数多くの水車が作られ、近隣農家の生活に大いに役立ち、また大正時代には製糸工場が水力発電所を建設・稼働したという歴史を持っています。

昨年4月に完成した照井土地改良区の3か所目の水力発電所を見学しました。

開放型のらせん水車は、落差2.34m、毎秒1.346m³の水量で最大出力19.9kW、およそ31世帯分の発電を行っています。低い落差でも回転し、ごみがつまりにくく、魚の遡上もできるという管理の容易な水車で、このタイプでは国産第一号でした。

この日はあいにく点検のため稼働はしていませんでしたが、らせん状の形がはっきりと見え、管理のしやすさ、魚も安心して登れそうだなと実感しました。



ているとのことでした。

この埋め立て地に降った雨による浸出水を処理する施設を見学。浸出水は調整槽に貯められ、薬品を注入し、汚水処理され、さらに砂でろ過し、活性炭で汚れを吸着、最後に消毒して川に放流するとのことでした。

私たちの出したごみの処理で燃やしたあとも、こうして手間をかけて処理されていることに、やっぱりごみは減らさなくちゃ…と思わざるをえませんでした。

④環境保全サービス：

太陽光パネル100%リサイクル（奥州市水沢）

廃棄対象となる太陽光パネルが、平成27年に産業廃棄物に指定され、リサイクル推進に向けたガイドラインも制定された中で、この工場で開発された『ガラスわけるⅢ型システム』という太陽光パネル専用の剥離・解体装置が稼働しています。



導線をカットしたパネルはそのまま投入すると、アルミ枠、表面ガラス、発電セル、バックシートに自動的に分別されます。

粉碎し異物を除いたガラスは、グラスファイバーメーカーや発泡ガラスメーカーへ、アルミ枠・電極・導線は金属商や古物商へ、発電セルは精錬工場へ販売し、そこで銀の回収がされます。バックシートはセメント工場での助燃材として再利用され、まさに100%リサイクルされるのです。

工場そのものは意外にコンパクトでしたが、この時は台風被害による廃棄パネルが全国から寄せられており、多忙のようでした。

②花泉図書館：

地中熱を利用した暖房施設（一関市花泉町）

木の香りがするモダンな建物で、玄関に足を踏み入れたとたん広い空間と自然なあたたかさを感じました。木のぬくもり、子ども達が気やすく集える、環境負荷が少ないという3つのコンセプトで建てられたこの図書館の最大の特徴は、地中熱を利用したヒートポンプシステムです。

地下100mまでの8つのホールからチューブを通して地中熱を採取し、ヒートポンプで圧縮・高熱化し、使用電力の4倍の暖房エネルギーを作ることができるということです。

③舞川清掃センター：最終処分場（一関市舞川）

清掃センターで焼却された一般廃棄物の焼却灰などの埋め立て施設です。焼却灰のうち3割の877tはセメント工場で材料として再利用され、残りの2,220tが埋められ

参加者の感想から

再生可能エネルギーの普及には、脱炭素社会の構築という確固とした理念が経営者には不可欠です。しかし、事業として始めるにはかなりの資金が必要ですが、小水力発電も太陽光パネルリサイクル事業も補助金を活用した事業でした。化石燃料に依拠した経済社会を転換し、事業をどう展開していくのかの知恵とヒントがチラッと見えた見学会でした。

～会員18名がスライドを見て話し合いました～

「気候危機緩和のための“行動”を一関から!!!」

一関市民センターにてIEL会員研修会を開催

①元アメリカ副大統領アル・ゴア氏の講演スライド 視聴(抜粋) ～佐々木勝裕 事務局長が紹介～

命あふれる美しい地球、しかし人間は毎日1億1千万トンにもおよぶ地球温暖化の物質を生み出し、地球の薄い大気の層に向かって、あたかもそれが下水溝であるかのように吐き出している。

汚染物質最大の発生源は化石燃料→CO₂排出速度と濃度が上がり→気温の異常＝極端に暑い気温の広がり・干ばつ・山火事・氷河の流出・海面上昇・高潮・水没する国々など

解決策はある! 再生可能エネルギーで!

風力・太陽光・リチウムイオン電池・電気自動車・LEDランプなど。

中国・インド・アメリカ・スコットランドなどは、50パーセント以上が風力や太陽光発電。日本はまだ低い。

②昨年10月の台風19号に関する気象庁発表資料について ～佐々木勝裕～

③気候非常事態宣言について

～会員 菅原邦久さんが作成したスライドにより説明～

- スウェーデンの少女グレタ・トゥーンベリさんが、たった一人で始めた「気候ストライキ」に触発されて、全世界にアクションが広がっている。
- 昨年9月20日には163の国々で400万人が行動、その後一週間で760万人が参加した。日本でも23都道府県で5,000人、盛岡でも参加。11月29日に再び各地でグローバル気候マーチを開催。

- 一関市東山町でも、世界同時多発アクションに呼応して講演会が行われた。
- 岩手県が2050年に温室効果ガス排出量の実質ゼロの目標を発表。
- 一関市や岩手県に気候非常事態宣言を求めて行動を起こそう。(すでにEUや日本でも長野県・多くの市や町が宣言を採択している。)
- 署名集めなど街頭キャンペーンにより世論を喚起しよう。

④話し合いから

- 地球は悲鳴を上げ、気候変動が起こっているのに、一般市民は危機感がない。
- COP25で日本がもらった化石賞に無反応。
- 水素ガスは触媒を使うと安く多量に作れる。
- 若い人へ働きかけよう。
- 電気自動車を使いたい。
- 一関市に急速充電スタンドがほしい。
- 市へ提言しよう。



たくさんの資料を見ながら行われた研修会

エコ ECOカフェについて

9月29日に一関市立図書館で、「エコカフェ～大切な地球のためにできること」が開催されました。講師は当協議会の千葉理恵さんが務めました。

地球温暖化のしくみや私たちの生活に及ぼす影響などについて、図表などを使い分かりやすく解説し、家庭でできること、心がけて生活したいことなどについて話し合いました。

その後に10人の参加者がドリンクとクッキーをいただきながら、日ごろから気になっている環境問題についての意見交換を行いました。

お茶っこしながら 話してみませんか!

- 地球温暖化について
- 再生可能エネルギーのこと
- 毎日の暮らし方
- 省エネ家電のこと

…など



お問合せ先 一関市役所生活環境課環境企画係

エコ ECOカフェ
どこにでも
出掛けまーす

HV (ハイブリッド) 車の停電…ブラックアウト

私のHV車はこれまで故障もなく8年が経過しました。ところが先日、エンジンを始動しようとしてプッシュボタンを押したところ、メーター類が一瞬点灯し、すぐにすべて消えてしまいました。車が急に停電状態(いわゆるブラックアウト)になり、私の頭の中は真っ白状態に。補機バッテリーの寿命が尽きたためでした。HV車やEV車に乗っている方は、5年過ぎたら補機バッテリーの点検・交換をお忘れなく! (菅原 寿)

編集後記